

『月刊ずいひつ』と 『コスモス文学』



滝川市医師会

村田 英俊

文章の書き方を覚えたくて「日本随筆家協会」に入会したのは医院開業後、昭和も終わる頃だった。

通信制添削指導を受けるため、原稿を書き上げてから添削券と一緒に送り、2～3週間後に赤ペンで至るところを直されて戻ってきた私の作品は、いつも見るも無残だった。「清書をしてから送り直してください。『月刊ずいひつ』に掲載しますから」の添え書きどおり、当初は指示に従って清書後に送り返し、掲載されていた。しかし、いつもある違和感を拭い切れずにいた。「果たして、これが自分の作品と言えるのだろうか」と。やがて、添削されたものは自分の作品ではないという結論に達し、以後は送り返さず、添削指導を受けるのみにした。

平成21年、主宰者で編集長の神尾久義氏の死去に伴い、娘さんが一時、引き継いだものの、程なく廃刊に至った。『月刊ずいひつ』は約80ページで、夏目漱石、寺田寅彦、芥川龍之介らの随筆も載っていて、もちろん一般投稿者の作品がほとんどだったが、ほぼ全投稿者と言ってもよいくらい年齢層が高かった。それは書かれた内容から十分判断できた。創刊は昭和21年なので、60年以上随筆専門誌としてその役割を果たしたことになる。当時は札幌市内の書店でも700円ほどで売られていたが、残念ながら今ではもうその姿を見ることができない。

「コスモス文学の会」に入会し、同人になったのは平成5年である。長崎を拠点とし、全国規模で小説、評論、随筆、脚本、童話、詩、短歌、ノンフィクションなど文学全般にわたって作品を同時募集する希少な組織だった。同人誌は非売品で、3ヵ月ごとに白を基調とした装丁のきちんとした冊子が部門別に数冊ずつ送られて来た。私は随筆のみの投稿だったが、投稿する楽しみの一方、読者としての楽しみもあった。中でも住居地が北海道の2人のS. S.さんと福岡のR. M.さんの作品には必ず目を通した。男性のS. S.さんは掌編小説のほか、時に随筆の投稿もあり、その内容から患者さんと分かった。患者の立場からの作品が私にとって参考になり、興味深く読むことが多かった。しかし、ある時を境に作品が全く掲載されなくなった。その筆力から不採用が理由でないことは明白だった。ひょっとして症状が悪化したせいかと懸念したが、詳細不明のまま、いまだに分からず大変気がかりである。もう1人のS. S.さんは女性で、おそらくペンネームと思われるが、非常に美しいその名前に惹かれ、掌編小

説を興味深く読んだ記憶がある。まさか、のちに直木賞を受賞するとは思ってもみなかったので、受賞した時には大変驚かされた。同時に、それ以前の平成9年頃、『コスモス文学』に詩を投稿されていたことを知った。経歴には『コスモス文学』に関する記載がなく、本名も不明なので全く気が付かなかったが、今や作家として大活躍、あまりにもビッグになり、夢を叶えただろうことに対し、大変敬服している。R. M.さんは拙著を希望され、贈ったことがきっかけで、作品に注目するようになった。詩の投稿が多かったが、医学部卒業後、三島由紀夫の『金閣寺』の修業僧の放火の理由を精神医学的見地から解いた評論が評価された女性で、詩以外にも多方面にわたって作品があるので、いずれまた、何らかの評価を得るのではないかと、私は密かに期待している。

『コスモス文学』も主宰者で編集長の広岡航氏の病気のため、平成23年に残念ながら廃刊に至り、その結果、文学全般にわたって全国募集するような場所がなくなってしまった。「日本随筆家協会」による添削指導はもちろん、両誌のお陰で私は、言葉遣いや書き方などかなり勉強になった。と同時にコンスタントに継続して投稿する難しさも知った。

時が過ぎ、ご存じない方が多いと思うが、平成20年代前半までこういう組織があったということ、少しでも多くの方に知ってほしくて、ペンを執った次第である。

